

北部バリにおけるエコツーリズムの発展戦略

Ni Luh Gede Meilantari¹富山 栄子²

要 旨

バリ島はインドネシアの観光地として有名である。バリ観光産業は1914年から始まり、オランダがバリ島のことを「最後の楽園」としてヨーロッパに宣伝するようになった。1956年に、インドネシア政府がバリの産業の中心を観光産業にして、バリにビーチホテルが建てられるようになった。インドネシア政府は1960年代後半から、民間セクターの形で、バリの南部でリゾート開発に乗り出した。南部バリは空港から近い為、リゾート中心の観光産業が育ってきた。それ以降、バリ島は農業生産から観光産業に向くようになった。これまでの観光産業は南部バリが中心であり、南部バリは発展したが、北部バリは発展せず経済的な格差が存在する。そのため、北部バリでは観光産業のイノベーションが必要であると考えられる。観光産業のイノベーションのためには、自然を破壊せずに行う、持続可能な観光、エコツーリズムが適切であると考えられる。その理由は観光者が来訪するため、経済の発展も可能だからである。

そこで、本研究は、北部バリにおけるエコツーリズムの発展戦略について研究を行う。そのために、最初に北部バリの観光産業とエコツーリズムの現状と課題を明らかにする。次に、北部バリの発展戦略の要として、バリ島にしか存在しない原始共産的なコミュニティ「バンジャルシステム」を活用したコミュニティベースツーリズムが、それらの課題についてどのように解決策になるのかについて考察を行う。

キーワード

観光産業、北部バリ、エコツーリズム、バンジャルシステム、コミュニティベースツーリズム

1 はじめに

1991年にインドネシアのバリ島で開催された太平洋アジア観光協会による「第40回 PATA (Pacific Asia Travel Association) 年次総会」において、世界のツーリズム産業が

¹ インドネシア、サラスワティ外国語大学文学部日本語学科講師

² 事業創造大学院大学 教授

環境問題に取り組んでいく方針が確認された。またこの会議において、エコツーリズムがインドネシアに紹介された。これを契機として、インドネシアではエコツーリズムがツーリズム産業の関心を集めるようになった (Menparda [2002])。

国連総会が2002年をInternational Year of Ecotourism (エコツーリズムの国際年) と明示した。同年、カナダのケベックで「世界エコツーリズム・サミット」が開催された。サミットでは、世界にエコツーリズムを促進するために「ケベック宣言」が採択された。インドネシアもこれに従い、2002年を「国内エコツーリズム年」として発表した。その時から、エコツーリズムはインドネシアで成長している観光産業である (Izawa [2013])。

1.1 研究の社会的背景

インドネシア政府は、エコツーリズムを通じて、自然資源を確保することができるため、エコツーリズムの開発を希望していた。バリ島は1970年代からインドネシアの一番の観光地となっている。それは1996年にエコツーリズムの国際会議が行われ、エコツーリズムに関する意識が生まれ、エコツーリズムの活動が人気になっているからである (Izawa [2013])。

バリ島はインドネシアの観光地として有名である。2014年のインドネシア中央統計庁の調査によると、バリ空港からインドネシアへ入国した観光客数は373万人である (表1)。インドネシアの中でバリ島は一番外国人観光客数が多い。インドネシア観光・創造経済省の2013年のデータによると、観光からの国の収入は約1,000万ドルで、45%はバリ観光産業からである (Teropong Bisnis [2013])。

バリ島は観光産業が中心である。このことは良いことばかりではなく、良くないこともある。2002年と2005年に爆弾テロがあり、バリ島の経済状況に大きな打撃を与えた。その年はバリ人やバリ島に住んでいる人々にとっては暗い年であった。復活する為に、政府は大規模なリゾート開発をやめ、新たな観光モデルを作りはじめた。また、今までの観光産業は南部バリが中心であり、北部バリとは経済的な格差が存在する。南部バリは発展したが、北部バリは発展してこなかった。それゆえ、北部バリでは観光産業イノベーションが必要となる。観光産業イノベーションにはエコツーリズムが良いと考えられる。なぜならば、北部バリは南部バリに比べて、緑が多く、政府はエコツーリズムの形を望んできたからである。

一方、南部バリでは観光産業が発展してから、バリの社会では変化が多く見られた。特に、バリ島の伝統的な文化、例えば、宗教行事や宗教的踊りや芸術作品が商業化された。若者は公園で酒を飲んだり、喧嘩したり、昔はなかった問題が発生した。社会問題や経済問題が発生した南部バリでは、エコツーリズムがこの問題解決であると考えられるようになった。なぜならば、エコツーリズムは経済発展とともに現地の自然、文化を維持できるからである。バリ島ではエコツーリズムは現地の社会に観光の悪い影響を減少させることができる (高橋 [2012])。

表 1. インドネシアの空港から入国した、外国人数

単位 (人)

Tahun 年	Bandara 空港					Jumlah 人数
	Soekarno Hatta ジャカルタ	Ngurah Rai バリ	Polonia/ Kualanamu 北スマトラ	Batam バタム	Bandara Lainnya その他	
1997	1 457 340	1 293 657	174 724	1 119 238	1 140 284	5 185 243
1998	883 016	1 246 289	70 441	1 173 392	1 233 278	4 606 416
1999	819 318	1 399 571	76 097	1 248 791	1 183 743	4 727 520
2000	1 029 888	1 468 207	84 301	1 134 051	1 347 770	5 064 217
2001	1 049 471	1 422 714	94 211	1 145 578	1 441 646	5 153 620
2002	1 095 507	1 351 176	97 870	1 101 048	1 387 799	5 033 400
2003	921 737	1 054 143	74 776	1 285 394	1 130 971	4 467 021
2004	1 005 072	1 525 994	97 087	1 527 132	1 165 880	5 321 165
2005	1 105 202	1 454 804	109 034	1 024 758	1 308 303	5 002 101
2006	1 147 250	1 328 929	110 405	1 012 711	1 272 056	4 871 351
2007	1 153 006	1 741 935	116 614	1 077 306	1 416 898	5 505 759
2008	1 464 717	2 081 786	130 211	1 061 390	1 496 393	6 234 497
2009	1 390 440	2 384 819	148 193	951 384	1 448 894	6 323 730
2010	1 823 636	2 546 023	162 410	1 007 446	1 463 429	7 002 944
2011	1 933 022	2 788 706	192 650	1 161 581	1 573 772	7 649 731
2012	2 053 850	2 902 125	205 845	1 219 608	1 663 034	8 044 462
2013	2 240 502	3 241 889	225 550	1 336 430	1 757 758	8 802 129
2014	2 246 437	3 731 735	234 724	1 454 110	1 768 405	9 435 411

(出所) Biro Pusat Statistik Indonesia (インドネシア中央統計庁) [2015]。

1.2 研究の学術的背景

Picard [2006] の研究によると、バリ島の観光産業はマスツーリズムである。マスツーリズムは大衆消費社会が到来した中で、大量生産・大量消費型の観光を前提としている。つまり、マスツーリズムは観光の量的拡大が目的である。しかし、世界のマスツーリズムの対象地域で、観光客の量的拡大に伴って、環境的、文化的、経済的な影響の負の側面が報告されるようになる。

2011年にインドネシア政府はMP3EI (Masterplan Percepatan dan Perluasan Pembangunan Ekonomi Indonesia: インドネシア経済発展拡大マスタープラン) を提案した。その中で、インドネシア政府は同国の経済発展の戦略として、バリは観光を重視すること、特に北部

バリの観光産業のインフラや新たな観光サービスを提供することが必要であることを提案している。

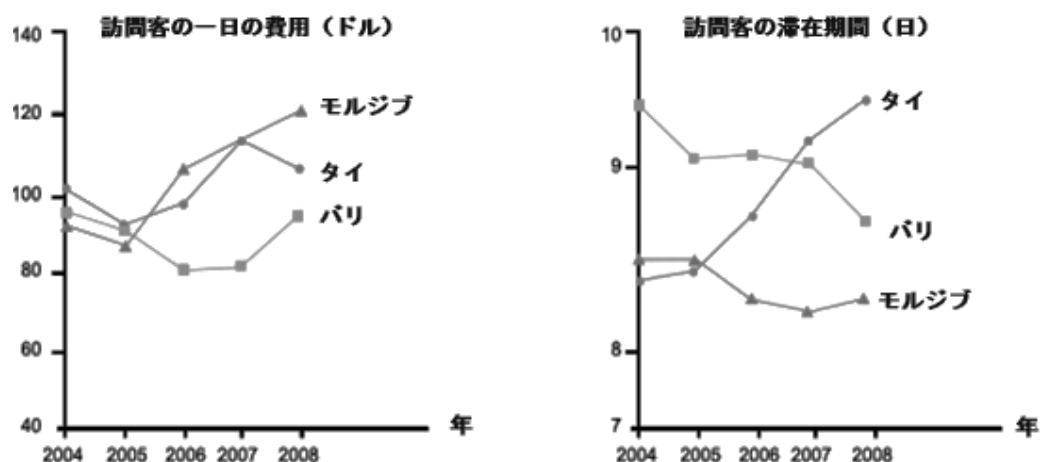


図1. バリ、モルジブ、タイの消費と滞在比較

(出所) Kementrian Perekonomian [2011]

南部バリはタイとモルジブと同様、リゾートが中心である。図1は、バリ、モルジブ、タイでの消費額と滞在を比較したものである。同図によると、モルジブやタイに比べ、バリへの来訪者は消費額が少なく、滞在期間も短いことがわかる。北部バリに新たな観光サービスができれば、バリへの来訪者の滞在期間が長くなることが予想される。そうになると、リゾート中心ではなく、文化や社会や環境を維持しながらの観光が可能になる。インドネシアの政府はエコツーリズムが解決策であると考えている。

また、バリでは「Banjar (バンジャル)」という社会コミュニティシステムが存在している。バンジャルシステムとは、原始共産主義的な社会システムを指す。南部バリはこのバンジャルのコミュニティが重要で、観光活動はバンジャルが経営することで、地域の発展ができていく。しかし、北部バリでは、バンジャルを活用した地域発展を行われていない。

1.3 研究の意義と独自性

本研究は、バリ島におけるエコツーリズムの現状と課題の分析を行い、それらの課題を解決するための北部バリの発展戦略を考察するものである。本研究の意義は、北部バリのような発展が後れた地域の持続可能な観光業のあり方を導くことにある。本研究はこれまでの観光業の既存研究を踏まえ、バンジャルシステムというバリ島にしか存在しないコミュニティに着目し、バリ島の観光業の持続可能なあり方を導くことを目的としている。北部バリに着目したエコツーリズムの研究はまだ存在しておらず、ここに本研究の意義がある。

本研究により、北部バリのエコツーリズムの発展戦略のあり方を示すことができ、地域住民の福祉向上に寄与することが期待される。

2 インドネシア及びバリのエコツーリズムの現状と課題

本章ではインドネシア及びバリのエコツーリズムの現状と課題について述べる。

2.1 インドネシアのエコツーリズムの現状と課題

インドネシアではエコツーリズムの定義がさまざまである。1994年政令No.18では「自然観光（エコツーリズム）は、自然観光の目的や魅力に関わる事業および自然観光分野に関連した各種事業も含む、自然観光に関わるすべての事柄」と定義されている。インドネシアの林業省自然保護総局は、「エコツーリズムは環境保全、経済的収益性、現地住民へ基準を満たす利益を供与する自然観光」と定義している¹。また、インドネシア内務省は、「エコツーリズムは地域に対して責任をもつ観光開発の一モデルである」と定義している²。

また、Ditjen Perlindungan Konservasi Alam他（インドネシア森林公園省他）[2000]の研究によると、地域とはまだ自然のまま、自然の美しさを享受できるだけでなく、研究調査の目的のために管理されている場所である。自然資源保全および地元住民の収入を向上させる試みに対する教育的側面、理解、支援的要素を含むものであり、エコツーリズムにおいては、自然資源保全、地元住民の福祉向上促進、持続的経済発展の為のあらゆる支援と常に関連付けられると定義している。

インドネシア文化観光省とWWFは、エコツーリズムとは①観光客を制限する（マストツーリズムと異なるため）。②環境に優しい観光地。③社会文化が保護できる。④現地の人の経済を発展できる。⑤観光地のためのインフラや設備の資本が高くない、と定義している³。

インドネシアにおけるエコツーリズム活動は国立公園、保護林などで実施されている。国立公園はインドネシアには50もある。その中にはグヌン・ハリムン・サラク国立公園（Taman Nasional Gunung Halimun Salak）も含まれている。この国立公園は首都のジャカルタから最も近い国立公園である。海拔570～1,929mに位置し、11万haの広さがある。ジャワ島固有の木や244種いる鳥類のうちジャワ島固有の27種、動物61種がみられる。小沢 [2004] の研究によれば、この国立公園は、日本の自然保護国際協力として先駆的な「生物多様性保全プロジェクト」が1995年から2003年まで東南アジアの熱帯林保護を目的に実施されたが、その事業のモデルとなった公園である。

2004年にタマン・グヌン・ハリムン・サラク国立公園内は住民による森林不法伐採の問題が起きている。この国立公園内とその周辺には多くの村があり、16万人以上の住民がいる。住民がしきたりに従って、国立公園内に家や農地を作る。地域住民にとっては、保護地域であろうなかろうと、生活のために資源利用が不可欠である。この森林保全に相反する地域住民のしきたり（アダット）が、保護地域管理を困難にしてきたといえよう（Pikiran Rakyat [2004]）。

インドネシアの国立公園はほぼ同じ問題を抱えている。住民のしきたりに対して、何も

できなくなる。Deny他 [2003] は、この問題についてエコツーリズムに関わる3つのアクターである、中央政府、地方政府、草の根のレベルの3者がその役割を分かっているからであると指摘している。

工藤 [2006] は、3者の役割について次のように述べている。すなわち、中央政府がエコツーリズムプログラムに関する規則、各関係者の役割、法律策定などの方針決定を行う。地方政府は国家レベルの方針に基づき、各地方政府が地方の現状に沿ったエコツーリズム地域の開発戦略計画を策定し、インフラ建設によるエコツーリズム地域のアクセス向上を図る。草の根レベルでは社会に根ざしたエコツーリズム開発、つまりエコツーリズムに参加するすべての関係者が公平な役割を与えられ、その結果、関係者が利益を享受することを目指している。草の根レベルで重要な役割を果たしているのはNGOである。

2.2 バリのエコツーリズム現状と課題

エコツーリズムを目的としてインドネシアを訪問する観光客の数は増加傾向にある。インドネシア中央統計庁 [2015] のデータでは、インドネシア国内エコツーリズム年、2002年では、訪問客数は500万人もいた⁴。しかし、2003年、バリ爆弾テロの影響で、訪問客数は100万人まで減少した。2007年から、エコツーリズムブームがあり、訪問客数は増加している。バリではエコツーリズムに関する活動がツアーパッケージとして人気である。エコツーリズムは2000年には、バリではブームになっていた。Anak Agung Gde Raka Dalemウダヤナ大学教授によると、エコツーリズムの開発は1980年代から始まったが、当時はまだ発展していなかった⁵。

インドネシアのエコツーリズムの定義は上述の通り、さまざまな定義がある。地方政府のバリ州でも中央政府からの定義をさまざまな形に訳されている。インドネシア語ではekotour, ekowisata, wisata alam (エコツアー、ナチュラルツーリズムを意味する) という言葉をどちらも「エコツーリズム」と地方政府や観光事業関係者は考えていた。この勘違いは注意することが必要である。

エコツーリズムの特徴は、海津 [2011] の研究によると、観光事業者や観光者など利用する側へのサービスに目的を置くのではなく、あくまでも地域資源の持続的な保全と利用を究極の目標に置いている点にある。そのための手段として、観光を通じた地域振興という手段を採用している。一方、ナチュラルツーリズムの活動では、持続的な目的や地元住民へのインパクトがなかった。そのゆえ、自然資源の保護や地域社会の雇用を創出できないので、エコツーリズムの定義からは少し外れている。

表2は、エコツーリズムとエコツアーの違いをまとめたものである(海津 [2011])。海津 [2011] によると、エコツーリズムの分類は理念であるが、エコツアーは商品である。エコツーリズムは購入不可能だが、エコツアーは購入可能である。エコツーリズムの担い手は多様であるが、エコツアーは観光者や事業者のみである。形態は、エコツーリズムは経営システムであるが、エコツアーはツアーにすぎない。

表2. エコツーリズムとエコツアー

視点	エコツーリズム	エコツアー
分類	理念	商品
購入可能か	不可	可
担い手	多様	観光者や事業者
形態	経営システム	ツアー

(出所) 海津 [2011] 32頁。

バリのエコツーリズムは3つのタイプがある。Arida [2014] に依拠して、以下に事例を説明する。

1. 投資家タイプ

このタイプの一つの例はギアニャル県タロ村（中部バリ）にあるElephant Safari Park（エレファント・サファリパーク）である。このサファリパークは2000年に設立された。2 haの土地がある。このパークの魅力は観光客が像に乗れ、植物園や像のミュージアムも設置されていることである。像に関して、様々なことが分かるパークである。

投資家タイプのエコツーリズムは、経営や発展は投資者の手にかかっている。投資家であるので、環境保護ではなく、利益が主たる目的になっている。エコツーリズムがブームになってから、投資家はこれを見て、「環境に優しい観光」や「グリーンツーリズム」などの「エコツーリズム」を名乗り、ツアーパッケージや植物園を設置した。

バリにおける投資家タイプのエコツーリズムはバリ州以外、外国から投資をして、利益を早めにもらうため、現地の社会保護や、現地の社会収入をあまり気にしない。このため、住民の参加も低くなり、エコツーリズムの定義から少し離れている。

2. 政府タイプ

政府タイプのエコツーリズムの特徴は中央政府のコントロールが強いことである。他の特色はスケールが小さくて、海外の国立公園や植物園を真似する傾向があり、地元住民の参加は少ない。意思決定は全部政府がするため、このタイプのエコツーリズムはトップダウン型、すなわち、上から下であり、政府のガイドラインやマニュアル通りにする。

政府タイプのエコツーリズムの事例はBatur Geopark（バトゥル・ジオパーク）である。ジオパークとは地球科学的な価値を持つ遺産（大地の遺産、ジオヘリテイジ、英語英：geoheritage）の保全を目的としたプログラムであり、その場所である。ジオパークでは、大地の遺産を保全し、教育やツーリズムに活用しながら、地域の持続可能な開発を進める仕組みを構築しようとしている。

3. 社会タイプ

このタイプのエコツーリズムはすべて社会の根ざしたエコツーリズムの開発、経営を行う。特色は社会の参加がとても高い。2016年3月6日、筆者がバリで実施したイン

タビュー調査の結果、ウブドサル（ウブドサル）の森の成功のポイントが以下のようなものであることが分かった。

第1に、他の地域と違い、Padang Tegal（パダンテガル村）ではキーパーソンがいた。キーパーソンであるバンジャル主将、Bendesa（バンデサ）がNGOと連携し、地元の観光資源を活用し、エコツーリズムを開発している。また、エコツーリズムがうまく行くために、モンキーフォレストを経営するとき、バンジャルを活用していた。このため、地域住民はモンキーフォレストについて、強い一体感があり、環境を保護しながら、経済発展も狙っている。

第2に、ウブドはもともと人気の観光スポットであり、ブランドポジショニングにより、他の地域に比べると、認知度が高い。ここで、社会文化的破壊を起こさないために、エコツーリズムを開発した。それはウブドのパダンテガル村、サル（サル）の森（Monkey Forest（モンキーフォレスト））である。モンキーフォレストとは、野生猿の自然保護区である。ウブドの中心部モンキーフォレスト通りの南の突き当たり（ウブドの中心部モンキーフォレスト通りの南の突き当たり）にあり、約200頭の猿が生息している。森の奥にはダルム・アグン・パダントゥガル寺院があり、森はプラ（ヒンズー寺院）の鎮守の森として聖域である。

第3に、ウブドのモンキーフォレストでは村のミッションはヒンズー教の信念「Tri Hita Karana（幸福への3つの道）」に基づき、村の森を保護することである。「Tri Hita Karana」とは神様との関係、人間関係、環境との関係がバランスが取れたら、幸福な生活ができるという信念である。村の人はこの信念を使って、モンキーフォレストを経営している。

ここでのエコツーリズム活動は、サル（サル）の生活がわかる上に、ヒンズー教の祭りに使われる木々がわかるようになる。ヒンズー教にとって、サルは神のような存在である。したがって、森にサルがいると、木の伐採をしない。それが、エコツーリズムに繋がる。また、森の中には寺院があり、祭りのときには寺院で祝う。こうした寺院や祭りによってヒンズー教の文化を知ることができる。このタイプのエコツーリズムは利益だけではなく、自分たちの文化を守るために、自分の地域の資源を分かるようになった。そのため、モンキーフォレストの入場料収入などで利益が多く得られても、自分の地域であるので、一生懸命に村人の寺院の祭等の地域の活性化に活用する。

3 北部バリにおけるエコツーリズム

本章では、北部バリの観光産業およびエコツーリズムの現状と課題、コミュニティベースエコツーリズム、バンジャルシステムについて論述する。

3.1 北部バリの観光産業の現状と課題

Handayani [2006] は、北部バリの観光の課題について、次のように述べている。

- (1) 観光地の周辺には環境破壊が起こっている。特にロビナ・ビーチには、海岸の周辺でゴミを捨てたり海にゴミを流したりする人が多数いる。これに対して、経営者（現地の政府、地元住民、ホテルの経営者）側からは環境問題に対する、行動がなかった。
- (2) 空港から遠く、アクセスもインフラも悪い。デンパサールからシンガラジャまで車で2～3時間かかる。道路は一つだけで、渋滞が多かった。この問題を解決するために、2007年に地方政府のバリ州とブレレン県は北部バリに空港を建設することを決定した。しかし、ブレレン県の公式サイトによると⁶、投資家がいなかったため、北部バリ空港建設の計画は中止になった。その後、2016年5月に、投資家が見つかり、Kubutambahan区に建設する予定である。
- (3) 経営資源が少ない。観光産業を発展するためには経営資源の人・金・モノ・情報が必要となる。北部バリには、モノ（観光地、自然環境）はたくさんあるが、人材育成、情報（ブランド化、プロモーションなど）、特に金が足りなかった。地方政府からの予算だけでは足りなかった。投資家が必要である。
- (4) 観光産業はサービス業であり、サービスが商品になる。他の商品と同じように、ライフサイクルがある。1980年にR.W バトラーが観光地域ライフサイクルモデルを提案した。中島 [1998] によると、バトラーのモデルは世界中の観光リゾートから政府の国立公園まで参考になった。バトラーのライフサイクルモデルによれば、北部バリの観光地は停滞段階になった。その原因はアクセスが悪く、情報が不足しており、人材の知識が足りないからである。この段階で観光地域の発展がなくなる。

これらの課題を解決するために、Handayani [2006] は次の戦略が必要であると述べている。

1. Attraction (魅力)

北部バリの魅力は自然な海岸、山、湖、イルカが見られる海である。これを利用して、新たなサービスを提供する。

2. Accessibility (アクセス)

今までの北部バリへのアクセスは一つの道路しかない為、渋滞が多く、観光客には不便であると感じられた。今後、政府は北部バリへのアクセスを考える必要がある。

3. Amenity (快適さ)

北部バリのホテルはたくさんある。ただし、新築ホテルより古いホテルが多い。このことも観光客にとって、快適さがなさそうであるため快適なホテルを整備する必要がある。

4. Ancillary (補助)

ホテル、レストラン以外にインフォメーションセンターも必要となる。また、お土産を買いたいお客様は免税店などが必要となる。

5. Community Involvement (コミュニティの参加)

これが一番大事である。観光の発展はコミュニティ又は現地の住民の手にある。その為、コミュニティの参加が必要となる。コミュニティは自分のコミュニティのニーズや良い点を一番解るからである。

3.2 北部バリのエコツーリズムの現状

2010年から、北部バリではいくつかのエコツアーパッケージができていた。北部バリではコーヒー豆が一番人気である。特にcivet coffee (インドネシア語ではkopi luwak) が人気である。Civet coffeeはジャコウネコの糞が一番良いコーヒー豆を選んで食べ、食べた後の便に残ったコーヒー豆をコーヒーに加工したものである。Civet coffeeは世界中で一番高いコーヒーとして知られている。パッケージツアーはコーヒーの畑を見学して、コーヒーの作り方を見て、バリのコーヒー (Kintamani coffee) を飲む、日帰りのツアーである。このようなツアーは個人経営で、地方政府やコミュニティにあまり利益をもたらさない。エコツーリズムの特徴は、観光事業者や観光者など利用する側へのサービスに目的を置くのではなく、あくまでも地域資源の持続的な保全と利用を究極の目標に置いている点にある。そのための手段として、観光を通じて、地域振興という手法を利用しているのである。以下に、Arida [2014] の研究に基づき、北部バリにおけるエコツーリズムの事例を上げる。

(1) 自然観光公園ブヤンとタンブリガン湖 (政府タイプ)

自然観光公園ブヤンとタンブリガン湖 (Taman Wisata Alam Buyan dan Tamblingan) はデンパサールから57km、車で1時間半ぐらいの所にある。この自然観光公園は1,366,50haの広さで、バリ州森林部の決定書、No.140/kwl-5/1997年により、保護地域と自然観光公園に定められた。ブヤン湖とタンブリガン湖は、バトゥル火山からできた湖である。最近ではキャンプ場として知られている。週末にはデンパサールから来た人がここにキャンプをし、魚を釣り、ボートに乗って観光活動をしている。その他に、研究の場と映画撮影の場としても知られている。ブヤンとタンブリガン湖に美しいヒンズー教の寺院があり、時々、観光客は寺院の祭を見たり、参加したりする。

2～3年前から、日帰りのキャンプ場として知られているブヤンとタンブリガン湖にゴミ問題と環境問題が起きた。それは観光客がキャンプをしたときに、駐車場ではなく、キャンプサイトにまで進入し、車を駐車したからである。キャンプが終わったら、ゴミはそのままにし、片付けもしない人やグループがいた。訪問客は環境問題や環境教育に対して、あまり知らなかったためである。国立公園やエコツーリズムには悪い行為である。しかし、管理人が少ないため、コントロールができない。また、経営するのは森林部であるため、地域住民の参加が少ない。

(2) セラット村の森 (社会タイプ)

セラット村は森の間に位置する村である。村は住民にとって、大事な存在である。時代が変わり、村の森も変化した。住民だけではなく、村外の人も木を伐採し、森林不法伐採の問題が起きている。そのため、村の川の水かさが減った。水がなくなると農業などができない。それを見て、現地の住民は心配になり、森の保護が大切だと感じ、森の保護活動を始めた。インドネシア森林省の支援があり、森林大臣決定書No.SK-629/Menhut-II/2010年、『村が経営する森に関する法規』が出た。セラット村は552ヘクタールの森の経営権利を政府に譲渡した。2011年2月、BUMDes (Badan Usaha Milik Desa村の社団法人) Pandan Harumが成立した。このBUMDesを通じて、森の保護活動ができた。2016年の1月から、NPOのSatin Baliとパートナーシップを組み、森の保護だけではなく、エコツアー、エコツーリズムの活動も始まっている⁷。エコツーリズムの活動が始まったら住民の収入も増加させたい意向である。

現在、セラット村の森の保護の事例は、インドネシアの森林省のモデルにもなっている。エコツーリズムの活動は始まったばかりであるので、住民への影響はまだない。

(3) レス村珊瑚保護 (社会タイプ)

レス村は漁師村である。熱帯魚と珊瑚に恵まれた地域である。1980年代にレス村の漁師はジャワ島の漁師から観賞魚の獲り方を習い、1990年代に、外国に観賞魚を輸出し、住民にとって、主要な職業になった。しかし、素早く魚をとるために、普通の網ではなく、青酸カリを使った。そのため、珊瑚の破壊を引き起こし、熱帯魚の種類が徐々に減少していった。それを見て、2001年、一人の漁師、Made Merta氏が伝統的な技術、珊瑚に優しい方法を用い、熱帯魚を獲った。その時から、珊瑚保護の活動が始まり、現地のNPO、Lini Foundation, Kehati Foundationなどと連携し、海中の珊瑚や熱帯魚の保護ができるようになった。レス村の漁師活動はバリ島中で有名になった。2005年から珊瑚保護以外に、ダイビング、シュノーケリングができ、観光地域として活用し始めた。

上述の3つの事例から、北部バリのエコツーリズムはもともと環境問題が起きたからこそ、保護活動が始まったことが分かる。その後、現地住民とNPOのパートナーシップが生まれ、自然保護だけではなく、観光地域として、観光活動も始まっている。

北部バリのエコツーリズムの課題は以下の点にある。

第1に、政府からの宣伝、支援が不足している。2016年5月30日現在、レスのサンゴ保護、セラット村の森はガイドブック (『BaliPlus Magazine』, 『Lonely Planet』) や北部バリ、ブレレン県の公式ウェブサイトには掲載されていない。その結果、北部バリにおけるエコツーリズムはツーリズムや観光活動として、発展してこなかった。

第2に、北部バリのエコツーリズムの問題はアクセスが悪いことにある。インフラを構築するためには、投資家が必要である。ただし、認知度が低いため、投資家を呼ぶのは難しい。

第3に、レス村の珊瑚保護の事例では、キーパーソンがいるが、バンジャルからではなく、漁師組合長から、環境保護や観光活動の誘いが来ている。また、村長への信頼感が薄いため、利益の分配が心配されている。Civet coffee tour（コーヒールワックのツアー）などは利益の分配が個人間で行われ、村へは利益配分がされなかった。

そのため、北部バリの発展戦略として、コミュニティベースエコツーリズムが良いと考えられる。なぜならば、このコミュニティに、バンジャルシステムが存在しているからである。

3.3 コミュニティベースエコツーリズム

コミュニティベースエコツーリズム（community based ecotourism）はコミュニティベースツーリズム（community based tourism）とエコツーリズム（ecotourism）のことである。コミュニティベースツーリズム（Community based tourism）を、山村 [2010] は、「コミュニティを基盤とし、コミュニティが主体性を持ち、自律的に観光振興を進めていくあり方」と定義している。また、コミュニティベースツーリズムとは訪問地域における持続的な雇用の創出や伝統文化、自然などを守るために、コミュニティが一体となっていくツアーリズムの形である。

コミュニティベースツーリズムは同時にコミュニティに最大限のメリットを生むツアーリズムの活動でもある。その最大限メリットは以下の通りである（山村 [2010]）。

1. ホームステイプログラムを行い、コミュニティが運営する宿泊施設を利用する。
2. コミュニティが運営するエコツアーに参加する旅行者の利用と、その出身ガイドの利用。
3. コミュニティが運営する飲食店や市場の利用。
4. コミュニティが販売するフェアトレード商品の購入。
5. ローカルな交通機関の利用。
6. コミュニティの歴史的、文化的、精神的に大切なものの保護ができる。

こちらのコミュニティは共同の感性を持つ地域社会を意味し、それは、人々の自律的な観光活動の実地・参加を可能とする「国家よりも小さな単位の間や社会」と捉えている。この意味に基づき、コミュニティベースエコツーリズムとは、コミュニティが自らの観光資源を活用し、地域の自然環境や文化保護を行っている観光活動の形である。

コミュニティベースエコツーリズムの主役はコミュニティであり、コミュニティは自らの地域をきちんと知っているからである。コミュニティの参加、つまり地元住民の参加が大事になっている。2009年のインドネシア文化・観光省とWWFの報告書によると、コミュニティベースエコツーリズムの定義を次のように説明している⁸。

1. 保護地域におけるエコツーリズムは「Green and Fair（グリーンとフェア）」であり、自然環境の保護と共に、観光を通じて、持続的な経済発展もできる。
2. 現地コミュニティとツアーオペレーターのパートナーシップ。エコツーリズムの

主役は地域住民だが、観光の経営に詳しくない住民はNPOやツアーオペレーターとの連携が必要となる。

3. コミュニティ中心の経済。訪問客はコミュニティの宿泊施設を利用し、コミュニティの市場で買い物し、コミュニティの名物をお土産にする。経済は全部コミュニティが運営する。
4. 環境教育ができる観光地。エコツーリズムの定義の一つは自然環境保護である。地域外の訪問客が深く、楽しく地域の自然環境とふれあい、教育ができるようになる。
5. 環境収容力 (carrying capacity) を考え、観光地を発展すること。環境収容力とは、ある環境において、そこに持続的に存在できる生き物の最大量である。ある環境下で利用できる食物・水・生息地など必要なものが制限されている中で、維持できる特定の生物の群集の大きさを、その生物にとっての環境収容力という。この制限をよく考え、観光地を発展する。

上記の説明から、北部バリにおけるエコツーリズムの発展戦略はコミュニティベースエコツーリズムがふさわしい。なぜならば、バリ島のコミュニティは一般の家族や部族を基盤として、構成されているからである。その社会コミュニティはバンジャルシステムと呼ばれている。

3.4 バンジャルシステム

Arif [2009] によると、バンジャルシステムは原始共産主義的な社会システムである。バンジャルとはバリ特有の最小単位の村組織である。いくつかのバンジャルが集まって、デサ・アダットと呼ばれる習慣村ができていく。アダットとはしきたり、習わし、地域の独特な伝統といった意味になり、バンジャルや各デサ (村) に、それぞれ異なるアダット (しきたり) がある。そのような理由からバリ人は、何かを説明するとき、「私の村では…」又は「私のバンジャルでは…」と前置きする。バンジャル長はバンジャル主将 (Bendesa) と呼ばれている。バンジャルがいくつか集まり、デサ (村) を形成し、その長は村長と呼ばれている。

バンジャルシステムはバリのヒンズー教に基づいて、「Tri Hita Karana (三つ幸福の原因)」を実現する。ヒンズー教により、幸福の原因は三つある。それは、

- (1) Parahyangan (パラヒヤガン) : 神様との関係。バンジャルではプラ (お寺) に表現する。
- (2) Pawongan (パウオガン) : 人間関係。バンジャルではゴトン・ロヨン (共同活動) に表現する。
- (3) Palemahan (パレマハン) : 周辺環境との関係。バンジャルでは日頃のバンジャルのゴトン・ロヨンに表現する。

北部バリでは、2013年のブレレン県統計庁のデータによると、148の村があり、その中

に557のバンジャルが存在する。これは北部バリにとって優れた人的資源だと考えられる。上記のレス村やセラット村のエコツーリズムの事例から、もともと村の設立の目的は、地域に環境破壊が起きたため、環境保護の活動が始まったことにある。村は、NPOと連携し、環境保護活動の開始と共に観光活動も始まっている。

村だけではなく、地域住民の参加を増やすためには、コミュニティアプローチのコミュニティベースエコツーリズム通じて、村の最小単位のバンジャルから始めると良いと考えられる。

4 むすび

本研究では、北部バリのエコツーリズムの現状と課題について論述し、北部バリのエコツーリズムの発展戦略について考察を行った。

北部バリのエコツーリズムの現状と課題は以下の通りである。

第1に、北部バリはアクセスが悪いため、訪問客が少ない。その為、政府が空港を建設する予定である。ただし、認知度が低いため、投資家がない。また、宣伝不足で、あまり知られていない。この問題の解決は、認知度を上げるため、バンジャルが南部バリで働くバンジャルメンバーの力を借り、宣伝をすべきである。

第2に、東部バリと違って、北部バリでは村と村の間にキーパーソンの存在がないため、経済ネットワークのような組織がない。各村はコーディネーターがないため、どんな観光活動をしたのかわからなくなる。ここでは政府の役割が必要になる。

第3に、地域住民の参加率が低い。バンジャルシステムは存在していたが、地域住民を活用していなかった。ウブドのモンキーフォレストのような、キーパーソンの存在もいなかった。このような状態ではキーパーソンが必要である。

第4に、人材資源や経営知識不足のため、NPOとの連携が多い。とくに、環境問題に関するNPOである。北部バリの若者は高校卒業後に、すぐ都市のデンパサルに行ってしまう。その為、人材不足で、人材育成もできなくなる。人材資源が不足しているため、バンジャルの役割が必要になる。若者にアントレプレナーの意識が起きるように、セミナー等が大事になる。

第5に、エコツーリズムの成立には、地域社会の関与が不可欠である。エコツーリズムは地域主導型の産業であることが理想であり、エコツーリズムを開発しようとする主体が地域主体自身であることが最も望ましい。

さらに、環境の保全を可能にするためには、環境収容力 (carrying capacity) も必要である。ツーリズムにおいて、環境収容力はさまざまな視点から規定されている。マスツーリズムが意図されているならば、環境収容力を考えずに、観光開発においては、地域住民の要求よりも観光客の要求の方が優先されるようになる。この例が南部バリで起きた。

マスツーリズムにならないように、北部バリはエコツーリズムが発展戦略としてふさわ

しい。エコツーリズムは、地域社会の住民が主体となって、ツーリズムをリードしていくことが可能だからである。そのため、コミュニティベースエコツーリズムが優れた提案になる。バリ島しか存在していない「バンジャルシステム」を利用し、観光活動を行うことが望ましい。バンジャルを活用すると、地域住民は利益が目的ではなく、環境保護や文化保護が目的であるため、エコツーリズムはうまくでき、経済発展と共に、地域活性化も可能になることが予想される。

【注】

- ¹ <http://pslh.ugm.ac.id/home/data/PP/PP%20No.%2018%20thn%201994%20ttg%20Pengusahaan%20Pariwisata%20Alam.pdf> 2016/7/14。
- ² http://ekowisata.org/wp-content/uploads/2011/11/P_33_2009_Dagri.pdf 2016/7/14。
- ³ Dirjen Pengembangan Destinasi Pariwisata Departemen Kebudayaan dan Pariwisata dan WWF Indonesia (インドネシア文化観光省観光地発展部とWWFインドネシア) [2009]。2000年当時スシロ大統領の時、観光省は文化相から分離し、文部科学省になり、観光省はMinistry of Tourism and Creative Economyの所属になった。
- ⁴ Biro Pusat Statistik Indonesia (インドネシア中央統計庁) [2015]。
- ⁵ http://www.parasnis.net/update181004/e_publi/gplinkeco/12chapter10.pdf 2016/7/14。
- ⁶ <http://bulelengkab.go.id/index.php/baca-berita/428/Sepakat-Pembangunan-Bandara-Internasional-Baru-Bali-di-Kubutambahan> 2016/7/29。
- ⁷ セラット村の森ウェブサイト (<http://hutandesaselat.org/about-me>, 2016/7/2) より、著者翻訳。
- ⁸ Dirjen Pengembangan Destinasi Pariwisata Departemen Kebudayaan dan Pariwisata dan WWF Indonesia (インドネシア文化観光省観光地発展部とWWFインドネシア) [2009]

【参考文献】

(邦文)

- 1 小沢直子 [2004] 「スハルト政権期の観光開発—五ヵ年開発計画を中心に—」『史苑』第64巻2号。
- 2 工藤尚子 [2006] 「インドネシア・エコツーリズムの展開—人材育成の視点から—」『ソシオサイエンス』Vol. 12, 3月。
- 3 高橋一夫、大津正和、吉田順一 [2012] 『1からの観光』碩学舎。
- 4 中島治久 [2006] 『観光からの地域づくり戦略』同文館。
- 5 海津ゆりえ [2011] 第I章第1-3節「エコツーリズムとは何か」, 真板昭夫, 石森秀三, 海津ゆりえ『エコツーリズムを学ぶ人のために』, 世界思想社, 13-42頁。
- 6 中島茂 [1998] 「観光地域の発展と衰退～バトラーのライフサイクルモデルの紹介～」『社会学部論叢』第8巻第2号, 3月。
- 7 吉田春夫 [2005] 『エコツーリズムとマス・ツーリズム』原書房。
- 8 山村高淑 [2010] 『コミュニティベースエコツーリズム事例研究』北海道大学観光学高等研究センター叢書 Vol.3。

(外国語)

- 9 Arida, Nyoman Sukma, M. Baiquni, Janiantara Damanik, Heddy Sri Ahimsa Putra [2014] “Dinamika Ekowisata Tri Ning Tri di Bali Problematika dan Strategi Pengembangan Tiga Tipe Ekowisata Bali” (「バリのエコツーリズムの課題、戦略発展と3タイプのエコツーリズム」), Gadjah Mada University Tourism Journal, Kawistra, No.2, Vol.4.

- 10 Biro Pusat Statistik Indonesia (インドネシア中央統計庁) [2015] “Bali in Figure 2015,” <https://bali.bps.go.id/index.php/publikasi/index?Publikasi%5BtahunJudul%5D=2015&Publikasi%5BkataKunci%5D=Bali+dalam+angka&yt0=Tampilkan,2017/03/23>.
- 11 Butler, Richard W. [2011]. *Tourism Area Life Cycle*. Oxford, Goodfellow.
- 12 Deny Hidayati, Mujiyanti, Laksmi Rachmawati, Andi Zaelani [2003] *Ekowisata: Pembelajaran dari Kalimantan Timur* (『エコツーリズム：東ボルネオからの学びこと』), Jakarta, Pustaka Sinar Harapan.
- 13 Dirjen Pengembangan Destinasi Pariwisata Departemen Kebudayaan dan Pariwisata dan WWF Indonesia (インドネシア文化観光省観光地発展部とWWFインドネシア) [2009] *Prinsip dan Kriteria Ekowisata Berbasis Masyarakat* (『コミュニティベースエコツーリズムの定義と基準』), Jakarta, Depbudpar.
- 14 Ditjen Perlindungan dan Konservasi Alam, Departemen Kehutanan dan Perkebunan RI, Fakultas Kehutanan, Institut Pertanian Bogor. (インドネシア森林公園省自然保護管理部とボゴール農業学校森林学部) [2000] “Indekasi Kebutuhan Pelatihan dan Pendidikan Ekowisata di Indonesia” (『インドネシアにおけるエコツーリズムの教育、訓練とニーズ』).
- 15 Euro Asia Management [1998] *National Tourism Development Master Plan*, Ministry of Tourism, Art and Culture, Directorate General Tourism, Republic of Indonesia.
- 16 Handayani, Lisa [2006] “Upaya Dinas Pariwisata dalam Pengembangan Potensi Pariwisata Kawasan Pantai Lovina: Studi di Dinas Kebudayaan dan Pariwisata Kabupaten Buleleng Bali-Bali” (『観光庁によるロビナ・ビーチの魅力を発展する戦略：バリ州、ブレレン県の文化・観光庁ケーススタディー』) Undergraduate Thesis, University of Muhammadiyah, Malang.
- 17 Izawa, Tomomi [2013]. “Ecotourism in Bali: Backgrounds, Present Conditions and Challenges,” Doctoral Dissertation, Ritsumeikan University.
- 18 Kementrian Perekonomian [2011]. *Masterplan P3EI Koridor Bali Nusra* (『経済発展マスタープランバリ・東南ヌサ編』), Jakarta, Kemenko.
- 19 Menparda [2002]. “Development of Ecotourism in Indonesia,” *in file Ecotourism Maldives/MPG*, Rh 02, 2002.
- 20 Lascurain, Hector-Ceballos [1986] “The Future of Ecotourism,” *Mexico Journal*, pp.13-14.
- 21 Orams, Mark B. [1995] “Towards a more desirable form of Ecotourism” *Tourism Management*, Vol. 16, No.1, pp.3-8.
- 22 Pikiran Rakyat [2004]. “Warga Ciptagelar Bantah Rambah Hutan,” *Pikiran Rakyat*.
- 23 Picard, Michael. [2006] *Bali: Cultural Tourism and Touristic Culture*, Singapore, Archipelago Press.
- 24 Teropong Bisnis [2013], Kontribusi Pariwisata di Bali Bagi Pendapatan Nasional, <http://www.teropongbisnis.com/teropong-ekonomi/kontribusi-pariwisata-di-bali-bagi-pendapatan-nasional,2016/3/31>.